

|                    |                                     |
|--------------------|-------------------------------------|
| <b>Title</b>       | 自我脅威状況下での補償的平均以上効果の検討：特性自尊心の水準を考慮して |
| <b>Author</b>      | 田端, 拓哉 / 池上, 知子                     |
| <b>Citation</b>    | 人文研究. 61 巻, p.172-183.              |
| <b>Issue Date</b>  | 2010-03                             |
| <b>ISSN</b>        | 0491-3329                           |
| <b>Type</b>        | Departmental Bulletin Paper         |
| <b>Textversion</b> | Publisher                           |
| <b>Publisher</b>   | 大阪市立大学大学院文学研究科                      |
| <b>Description</b> | 栄原永遠男教授：中村圭爾教授退任記念                  |

Placed on: Osaka City University Repository

# 自我脅威状況下での補償的平均以上効果の検討<sup>1)</sup> —特性自尊心の水準を考慮して—

田端拓哉 池上知子

本研究は、平均以上効果が自己高揚動機に由来するかどうかを、ボーガス・フィードバック法によって検討した。自己のある側面に対して脅威となる出来事を経験すると、脅威を受けた側面とは無関連な側面において補償としての強い平均以上効果を示すであろうと予想した。高い特性自尊心または低い特性自尊心をもつ120人の大学生が実験に参加した。参加者は、知性の側面への自我脅威の水準を操作するため3つのフィードバック条件のうちの1つに、ランダムに割り当てられた。脅威水準の操作後、参加者は自分の優しさと社交性について所属集団内での水準(パーセンタイル)を評定した。予想に反して、特性自尊心の水準にかかわらず、脅威の水準が高まるにつれて平均以上効果の大きさは低下し、自己のある側面に関する否定的出来事は他の側面にも波及することが示された。この結果について自己複雑性と補償資源への接近可能性の観点から論じた。

## 序論

### 1. 問題

Taylor & Brown (1988) は、人には非現実的なまでに自分自身を肯定的に捉える傾向があることを指摘し、これをポジティブ・イリュージョン (positive illusion) と称した。ポジティブ・イリュージョンはさまざまな態様をとって表れるが、その1つに平均以上効果 (better-than-average effect) がある。平均以上効果とは、人々が自分の能力や性格特性を、平均的他人や所属集団内の平均もしくは中位よりも良いものと見なすために、集団の平均が理論的な平均を上回ることと定義できる。たとえば、大学教員に教育能力の自己評価を求めた調査では、94%の教員が自らを平均より上と評価し、68%の教員は自分が上位4分の1に含まれると評価していた (Cross, 1977)。このことは、平均が集団の中央値とは限らないことを考慮してもなお、平均以上と自己評価した教員が多すぎると考えられる。また、大学生に、種々の人格や能力の特性について、自己と“平均的大学生”のそれぞれへのあてはまりを評定させた研究では、望ましい特性 (e.g., kind) は平均的大学生よりも自己にあてはまり、望ましくない特性 (e.g., impolite) は自己よりも平均的大学生にあてはまるという、自己を平均より望ましく評価する傾向がみられた (Alicke, 1985)。もっとも、本邦では自己卑下的な自己評価が優勢であるという見解があり (e.g., 唐澤, 2001)、平均以上効果は欧米人に比較して表れにくいことが予想される。しかし、日本人を対象とした研究でも、特性によりいくぶん相違はあるものの平均以上効

果が確認されていることから (e.g., 伊藤, 1999; 外山・桜井, 2001)、ある程度通文化的な現象といえる (cf. Alicke & Govorun, 2005)。このように平均以上効果は比較的頑健な現象として知られているが、比較対象となる他者の抽象性や比較次元の曖昧さ及び統制可能性、また、測定方法等によって、効果の表れ方が変動することも多くの研究によって明らかにされている (e.g., Alicke, 1985; Alicke, Klotz, Breitenbecher, Yurak, & Vredenburg, 1995; Allison, Messick, & Goethals, 1989; Otten & van der Pligt, 1996; レビューとして Alicke & Govorun, 2005 参照)。

平均以上効果をめぐる最も重要な論点は、この効果のもつ適応的意義に関するものであろう。Taylor & Brown (1988) は、平均以上効果を含むポジティブ・イリュージョン全般を、自己高揚動機の発露ととらえ、精神的健康 (well-being) の維持に資するものであると述べている (Taylor & Brown, 1994; 遠藤, 1995 も参照)。事実、平均以上効果は特性自尊心の高い人ほど認められやすく (Brown, 1986; 伊藤, 1999; Suls, Lemos, & Stewart, 2002)、抑うつ傾向の高い人には表れにくいといった知見がある (Tabachnik, Crocke, & Alloy, 1983)。もっとも、平均以上効果については、必ずしもそれが自己高揚動機を反映しているとは限らず、非動機的要因によって解釈可能であるとする論者も多い (e.g., Klar, 2002; Kruger, 1999; 工藤, 2004)。しかしながら、それらの主張も、平均以上効果が非動機的要因によっても生起する可能性を指摘しているのであって、平均以上効果の生起機序に自己高揚動機が関与している可能性を否定したり、その適応的意義をただちに覆したりするものではないと考えられる (cf. Alicke & Govorun, 2005; Chambers & Windschitl, 2004)。

ただし、平均以上効果を自己高揚動機の表れとみなし、その適応的意義を主張する研究は、主に調査によって平均以上効果と抑うつやストレス反応などの精神的健康の指標との相関を検討するか (e.g., Tabachnik et al., 1983; Taylor, Lerner, Sherman, Sage, & McDowell, 2003; 外山・桜井, 2000)、縦断研究によって平均以上効果の精神的健康への予測力を検討しているもの (Zuckerman & O'Loughlin, 2006) が大半を占める。そのため、観察された平均以上効果が、自己高揚動機の表れであるのか、それとも、適応や精神的健康の状態の良さを反映した結果として生じたものであるのかを区別できていない。たとえば、Taylor & Brown (1988) は、ポジティブ・イリュージョンが適応的であるとする根拠の一つに、自己を肯定的に見なすガン患者はガンにうまく対処できたという研究結果 (Taylor, 1983) を挙げている。このことはガンの発症という苦境に陥ってもなお生起する平均以上効果こそが適応をもたらす可能性を含意していると考えられる。だが、これまでの研究は、この点を考慮した検討が十分なされていない。平均以上効果が自己高揚動機によって引き起こされ適応や精神的健康をもたらすならば、低下した自己評価を再び高揚させうる心理的レジリエンス (弾力性) が必要と考えられる。つまり、何らかの脅威にさらされ自己高揚動機が喚起されたときの平均以上効果について検討しなければ、その適応的機能が十分に検討されたとは言えない。

一般に、困難や失敗は、特にそれが自己の重要な側面に関係するものであれば、自己への脅威 (ego/self-threat) となり、自尊心 (状態自尊心) を低下させる。そして、低下した状態自尊心を回復するため、さまざまな対処反応が生じるとされる (e.g., Tesser, Campbell, & Smith, 1984; Vohs & Heatherton, 2004)。その一つに、脅威を受けた次元とは異なる次元での自己評価を強化することにより脅威に対処することが知られている。たとえば、Wicklund & Golwiter (1982) は、自己定義にかかわる領域で十分役割を果たせないとき、人は、別の領域でそれを代替させようとする述べているし、Steele (1988) による自己肯定化理論に基づく研究でも、自己の特定の側面における脅威に対し、人はそれと無関連な側面での自己を肯定化することで自己全体を保護することが明らかにされている。さらに、Brown & Smart (1991) は、知的能力検査の成績が低かったとフィードバックされ知的能力の自己評価を低下させた実験参加者が、知的能力とは異なる側面である優しさや思いやりなどについてはむしろ自己を高く評価し援助行動が増大することを見出している。これは、脅威を受けた側面とは異なる自己の望ましい側面に自ら焦点化することで自己評価が補償された可能性を示唆している。彼らの研究は、平均以上効果を検討したものではないが、平均以上効果についても、もしそれが自己高揚動機によってもたらされるのであれば、脅威を受けた次元での平均以上効果は低減しても、別の次元ではむしろ平均以上効果が増大すると考えられる。そこで本研究では、自我脅威状況下での補償的平均以上効果の生起について検討することを第一の目的とした。

自我が脅威にさらされ、一旦低下した自己評価を再び高揚させようとする心理機制は人一般に備わっていると考えられるが、その働き方には個人差があることも予想される。Dodgson & Wood (1998) は、特性自尊心が高い人ほど失敗を経験したとき、自己の良い側面の情報の想起可能性が高いと報告している。上述のBrown & Smart (1991) の研究でも、補償的自己高揚は、特性自尊心が高いほど表れやすいことが確認されている。また、最近の研究において、自分より優れた他者との比較により脅威にさらされた個人が、自分と同水準の別の他者との比較において自己高揚的に評価する傾向を示すことが見出されているが、それも特性自尊心の低い人よりも高い人に顕著に認められることが示されている (Seta, Seta, & McElroy, 2006)。Seta et al. (2006) は、特性自尊心による自我脅威状況における回復力の差は、補償を行うための資源 (自己についての肯定的情報) への接近可能性の違いを反映していると述べている。したがって、本研究で検討する、脅威を受けた次元とは別の次元での補償的な平均以上効果の生起にも特性自尊心が関係すると推測される。特性自尊心の高い人たちは、低い人たちより、脅威を受けていない側面での自己に関連する好ましい情報を想起する能力が高いと考えられるからである。この点を検討することを本研究の第二の目的とした。

本研究の仮説は以下の通りである。

1. 自己の特定の側面が脅威を受けると、別の側面での平均以上効果が増大する。
2. 上記の補償的平均以上効果は、自尊心の低い者より高い者において顕著に認められる。

## 方法

### 1. 実験参加者の選定

本実験を実施する2週間～4週間前に実験参加者を選定するため、大学生400名(男性180名、女性220名、平均年齢19.22歳、 $SD = 1.55$ 、年齢の範囲18-32歳)に質問紙調査を行った。Rosenberg (1965) の“Self-Esteem Scale”の邦訳版である10項目からなる自尊感情尺度(山本他, 1982; 山本, 2001)を心理学の講義時に配布し実施した。回答は、尺度の各項目に回答者がどの程度あてはまるかを、5件法(1. あてはまらない～5. あてはまる)で回答させた。信頼性係数を低下させていた1項目を除いた9項目( $\alpha = .82$ )について項目平均を求め特性自尊心得点とした( $M = 3.25$ ,  $SD = 0.77$ )。そして、本実験への参加意思を表明した171名の最高得点者と最低得点者からそれぞれ高得点順もしくは低得点順に実験への参加を依頼し、上位得点者60名を高特性自尊心群( $M = 3.88$ ,  $SD = 0.41$ )、下位得点者60名を低特性自尊心群( $M = 2.47$ ,  $SD = 0.47$ )とした。

### 2. 参加者

上記予備調査により抽出された120名(男性51名、女性69名、平均年齢18.70歳、 $SD = 0.9$ 、18-23歳)が実験に参加した。特性自尊心の水準と参加者の性別は条件間でそれぞれカウンタバランスした。

### 3. 手続き

実験は実験室において個別に行われた。参加者が実験室に入室後、まず実験参加への同意を文書により得たうえで、以下の手順で実施した。実験の所要時間は30分程度である。

(1) 脅威の操作 既存の知能検査を改定するための基礎資料の収集に協力してほしいと虚偽の教示を行い、知能検査を実施した。知能検査は新訂京大NX15-知能検査第2版(学阪・梅本, 1984)の検査のうち、本実験に適すと考えられた5つの検査(第2, 第3, 第5, 第6, 第7検査)を選択した。検査終了後、参加者の成績について偽のフィードバックを与えた。与える脅威の水準を操作するためフィードバックの内容により3条件設けている。一つは、参加者の成績が所属大学の学生集団内の下位にあることを告げる下位条件、2つめは同集団内の中位にあると告げる中位条件、そして3つめの条件が、同集団内の上位に位置すると告げる上位条件であった。下位、中位、上位条件の順に自我に与える脅威が強くなることを想定している。条件ごとに偽の知能検査の結果を示す結果シートを予め作成し呈示した。結果シートの上半分には、全参加者の成績の分布図をカラー印刷で示した。図には、所属集団内での参加者の位置づけを明記した(下位683位、中位374位、上位70位/751人中)。また、結果シートの下半分には、知能検査の名称や知能の安定性の高さ、参加者の所属大学内での知的能力水準、過去の同水準の被検査者が就業している職種(e.g., 上位: 大手企業社員、中位: 中堅企業会社員、下位: 中小企業社員)を記載した。

(2) 脅威操作の確認 次に、脅威操作の有効性を確認するため状態自尊心を測定した。

Heatherton & Polivy (1991) の状態自尊心尺度から、有能さの認知を測定する下位尺度である“Performance”のうち、操作確認に適していると考えた3項目を邦訳して用いた (e.g., “自分の出来の悪さに失望を覚える”)。各項目について現時点での気持ちを5件法 (1. あてはまらない~5. あてはまる) で回答させた。併せて、フィードバックの内容を実験者が意図したとおり認知していたかを確認するため、自分の成績の水準を5段階で回答させた (1. 下位~5. 上位)。

(3) 平均以上効果の測定 続いて、別の研究目的のためと称して、平均以上効果を測定する質問紙を実施した。山本他 (1982) の自己認知の11側面のうち、“優しさ”の側面と“社交”の側面 (以下、社交性) から、本研究に適していると判断した3項目ずつを選択し表現を名詞形に変更して使用した (e.g., 優しさ: “思いやり”、社交性: “交際範囲の広さ”)。また、“まじめさ”の側面の3項目をフィラーとして用いた。回答方法は、伊藤 (1999、研究2) に倣い、これらの項目が表す特性の程度 (強さ) について、所属大学の学生集団内での自分の水準 (パーセンタイル) を、10段階 (“下位10%以内”、“下位11~20%”、から“上位10%以内”) から選択させた。

(4) ディブリーフィング 上記課題の終了後に実験の真の目的を説明し、虚偽の教示を行ったことについて謝罪した。最後に実験の感想を回答してもらい終了した。

## 結果

知能検査と平均以上効果の測定のための質問紙との関連性を疑った参加者はいなかったの  
で、実験に参加した120名全員を分析の対象とした。

### 1. 操作確認

フィードバックされた結果の認知の平均評定値をフィードバック (下位・中位・上位) × 特性自尊心 (高・低) のセルごとに求めた (Table 1)。フィードバックと特性自尊心を要因とする 3 × 2 の分散分析を行ったところ、フィードバックの主効果のみが有意であった ( $F(2, 112) = 471.23, p < .001$ )。そこで、特性自尊心の高群と低群を込みにしてフィードバック条件についてTukeyのHSD法による多重比較を行った結果、自分の知能検査の結果について、中位条件より上位条件のほうが自らを上位と認知し、下位条件より中位条件のほうが自らを上位と認知し、下位条件より上位条件のほうが自らを上位と認知していた ( $MSe = 0.22, p < .05$ )。

次に、状態自尊心尺度の3項目について信頼性を検討するためにCronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ、 $\alpha = .70$ だった。尺度の信頼性が概ね得られたと判断して、3項目の平均評定値を

Table 1. 結果の水準の認知

| 特性<br>自尊心 | フィードバック  |     |       |          |     |       |          |     |       |
|-----------|----------|-----|-------|----------|-----|-------|----------|-----|-------|
|           | 下位       |     |       | 中位       |     |       | 上位       |     |       |
| 高群        | $N = 20$ | 1.0 | (0.0) | $N = 20$ | 3.0 | (0.0) | $N = 20$ | 4.3 | (0.6) |
| 低群        | $N = 20$ | 1.2 | (0.7) | $N = 19$ | 3.0 | (0.0) | $N = 19$ | 4.3 | (0.7) |

NOTE: ( )内はSD

Table 2. 状態自尊心得点

| 特性<br>自尊心 | フィードバック |     |       |      |     |       |      |     |       |
|-----------|---------|-----|-------|------|-----|-------|------|-----|-------|
|           | 下位      |     |       | 中位   |     |       | 上位   |     |       |
| 高群        | N=20    | 2.6 | (0.9) | N=20 | 3.1 | (0.5) | N=20 | 3.9 | (0.9) |
| 低群        | N=21    | 2.2 | (0.8) | N=20 | 2.3 | (0.7) | N=19 | 3.4 | (0.7) |

NOTE: ( )内はSD

状態自尊心得点とした (Table 2)。状態自尊心得点について上記と同様に  $3 \times 2$  の分散分析を行った結果、フィードバック条件の主効果 ( $F(2, 114) = 31.61, p < .001$ ) と特性自尊心の主効果 ( $F(1, 114) = 17.47, p < .001$ ) が有意であった。両要因間の交互作用は有意でなかった ( $F(2, 114) = 1.03, n.s.$ )。そこで、特性自尊心の高群と低群を込みにしてフィードバックについて Tukey の HSD 法による多重比較を行った結果、状態自尊心は、下位条件は上位条件より低く、中位条件も上位条件より低かったが、下位条件と中位条件に状態自尊心の有意な差は認められなかった ( $MSe = 5.08, p < .05$ )。

以上のように、フィードバックされた“下位”、“中位”、“上位”といった記述に概ね対応して自らの知能検査の結果が認知されていることが確認された。中位条件と下位条件の状態自尊心の差異は微妙な差といえるが、少なくとも本研究の予測とは反対の傾向は表れなかったことから、脅威の操作は概ね有効であったと判断し仮説の検討を行った。

## 2. 補償的な平均以上効果

自己評価の各側面について尺度の信頼性を検討するために Cronbach の  $\alpha$  係数を求めたところ、“優しさ”は  $\alpha = .82$ 、“社交性”は  $\alpha = .83$  と十分高い値が得られた。これらを平均以上効果の指標とするために、それぞれの項目について、選択された回答カテゴリの中央の値を回答値と見なし (e.g., 下位 11~20% ならば 15)、フィードバック (下位・中位・上位)  $\times$  特性自尊心 (高・低) のカテゴリごとに各側面の平均評定値を求めた。その値から、中点の値である 50 を引いて、平均以上効果の指標とした (数値が 0 より高ければ平均以上効果を表し、低ければ平均以下効果を表す)。

補償的な平均以上効果を検討するために、側面ごとに分析を行った。“優しさ”の側面の評定値について (Figure 1)、フィードバック (下位・中位・上位)  $\times$  特性自尊心 (高・低) のセルごとに、0 との差を  $t$  検定 (両側検定) により検討した。その結果、高特性自尊心群は中位条件と上位条件において評定値が 0 よりも有意に高く (順に、 $t(19) = 2.53, p < .05$ ;  $t(19) = 3.54, p < .01$ )、平均以上効果が認められた。一方、低特性自尊心群は上位条件においてのみ評定値が 0 よりも高いという有意傾向がみられ ( $t(18) = 1.79, p < .10$ )、平均以上効果の生起が示唆されるにとどまった。次に、フィードバックと特性自尊心を要因とする  $3$  (下位・中位・上位)  $\times 2$  (高・低) の分散分析を行ったところ、有意傾向であるがフィードバック条件の主効果が認められた ( $F(2, 114) = 2.94, p < .10$ )。特性自尊心の主効果や特性自尊心フィードバック条件

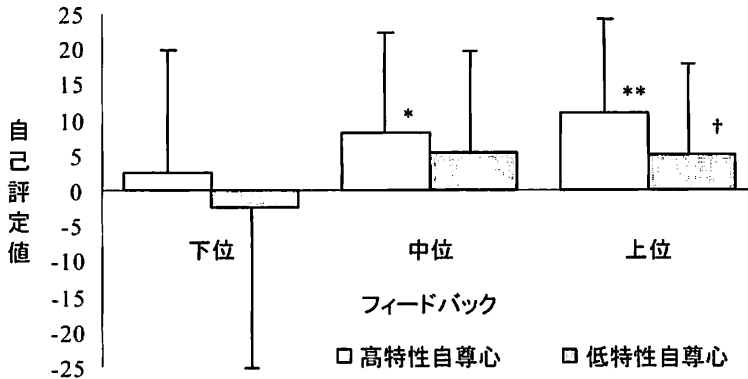


Figure 1. 特性自尊心ごとの優しさの側面についての平均自己評定値。自己評定値が0より高ければ平均以上効果。0との差についての有意確率: \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

の交互作用は認められなかった (順に  $F < 2.30$ ,  $F < 0.96$ , n.s.)。つまり、フィードバックの効果や個人差としての特性自尊心の効果は明確には認められなかったが、“優しさ”の側面では、セルごとに平均以上効果を見る限りでは、フィードバックが下位の場合は平均以上効果が生じなくなり、中位の場合は特性自尊心が相対的に高ければ平均以上効果が表れ、上位ならば特性自尊心にかかわらず平均以上効果がみられるという結果になった。全体的に見れば、フィードバックによる脅威が大きくなるほど、どちらかといえば優しさの自己評価は低下する傾向にあった。したがって、“優しさ”の側面において、脅威の大きい下位条件で補償的な平均以上効果が生じやすいという仮説1は支持されなかった。また、この傾向は特性自尊心が高いほど認められやすくなるという仮説2も支持されなかった。

“優しさ”の側面と同様に、“社交性”の側面についても同様に分析を行った (Figure 2)。“社交性”の側面は平均以上効果を示したセルがなかった。0との差を  $t$  検定 (両側検定) により検討した結果では、低特性自尊心群の下位条件と中位条件において有意となり (順に、 $t(20) = -2.69$ ,  $p < .05$ ;  $t(19) = -2.20$ ,  $p < .05$ )、平均以上効果とは反対の傾向である平均以下効果が認められた。つまり、フィードバックが下位もしくは中位の場合は特性自尊心が相対的に低ければ平均以下効果が生じ、上位ならば特性自尊心にかかわらず平均以下効果も平均以上効果もみられないという結果になった。次に、フィードバックと特性自尊心を要因とする3 (下位・中位・上位) × 2 (高・低) の分散分析を行ったところ、有意傾向であるが特性自尊心の主効果が認められた ( $F(1, 114) = 3.79$ ,  $p < .10$ )。ただし、フィードバックの主効果も特性自尊心とフィードバックの交互作用も認められていない (順に  $F < 0.40$ ,  $F < 1.15$ , n.s.)。したがって、“社交性”の側面についても、フィードバックによる脅威が増すと、どちらかといえば自己評価が低下する傾向にあり、仮説1, 2とも支持されなかったことになる。フィードバックの下位条件において、高特性自尊心群は低特性自尊心群のように自己評価を低下させなかったという点は、下



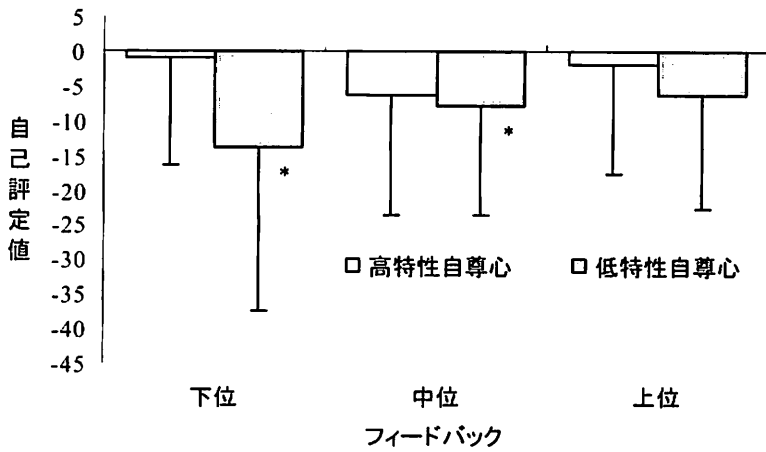


Figure 2. 特性自尊心ごとの社交性の側面についての平均自己評定値。自己評定値が0より高ければ平均以上効果。0との差についての有意確率: \*  $p < .05$

位条件において相対的に特性自尊心が高いほうが補償としての平均以上効果を示しやすいという仮説に沿う結果といえなくもないが、高特性自尊心群でも平均以上効果自体が示されなかったため、仮説が支持されたとは言い難い。

以上のように、フィードバックの下位条件において特に高特性自尊心群に補償的な平均以上効果が生じるという仮説は、“優しさ”と“社交性”のいずれの側面においても支持されず、むしろ下位条件では知的能力の否定的な評価が自己の他の側面の評価にまで反映される結果となった。

### 考察

本研究の目的は、平均以上効果が自己高揚動機によってもたらされるものであるかどうかを、自我脅威状況下での効果の生起過程を見ることによって検討することであった。具体的には、人は自己のある側面 (i.e., 知性) で脅威を受けると、それを補償するために別の側面 (i.e., 優しさ、社交性) で強い平均以上効果を示すようになり、また、それは自己の肯定的情報へのアクセス可能性の高い高特性自尊心者に顕著に認められるであろうという仮説を立て検討した。その結果、特性自尊心が高ければ平均以上効果が表れやすいという従来の研究と一致する傾向はみられたが、予想したような補償的な平均以上効果は表れず、仮説は支持されなかった。むしろ、どちらかといえば、フィードバックにより知的側面への脅威が増すと優しさにおいても社交性においても自己評価が低下するという傾向がみられた。特に、先行研究では“優しさ”の側面は平均以上効果が表れやすい側面であることが示されているにもかかわらず (e.g., 伊藤, 1999)、下位条件では低特性自尊心群だけではなく、高特性自尊心群でも平均以上効果がみられなくなった。“社交性”の側面については、平均以上効果自体が全くみられなかった。これは、本邦では“社交性”の側面では平均以上効果が表れにくいという指摘があることから (e.g., 伊

藤, 1999)、この側面に固有の文化的要因(外山・桜井, 2001)に起因する可能性も考えられる。本研究では、平均以上効果が生じにくい側面でも、脅威にさらされ自己高揚動機が喚起されると平均以上効果が生じるかもしれないと考えたが、結果は、脅威が増すと平均以下効果がさらに増幅されるというものであった。

以上、本研究の結果は、知的能力の評価が、知的能力とは無関係であるはずの他の特性評価にまで及びうることを示している。ある特定の自己の側面に対する低い評価が他の自己の側面や全体的な評価に般化するという現象は、過去にも報告されている(e.g., Brown & Dutton, 1995)。このようにある次元でのネガティブな出来事が他の次元の評価にも波及する現象(spillover effect)は、自己複雑性(Linville, 1985, 1987)と関係があると言われている。自己複雑性とは自己概念がどのくらい多様な側面に分化し、それら相互の弁別性が高いかを表す概念である。したがって、ある領域で低い評価を受けるなど否定的な出来事によってネガティブな気分が生じたとき、自己複雑性の高い人は、自己の諸側面が相互に分化しているため、出来事の影響が他の領域に波及しにくい、自己複雑性の低い人は、自己の諸側面が十分分化していないため、低い評価を受けた側面以外の側面に影響が波及しやすく、結果、自己の別の側面での肯定的な情報も想起されにくくなると考えられる(e.g., 榊, 2006)。このことから、本研究において知的能力の評価が“優しさ”の側面に及んだことも、参加者の自己複雑性が比較的良かったために生じた可能性が考えられる。また、榊(2006)は特性自尊心の水準にかかわらず自己複雑性の効果がみられることを示し、気分の修復やその影響の緩和には自尊心より自己複雑性が重要な役割を果たしていることを示唆している。これらのことから、本研究において、高特性自尊心群にも補償的な平均以上効果がみられなかったのは、相対的な自己複雑性の低さのために、特性自尊心の高い者でも自己肯定的な情報資源を十分利用できず、そのためにレジリエンスが発揮されなかった可能性が考えられる。加えて、フィードバックから平均以上効果の測定までの時間間隔の短さも、補償的な平均以上効果がみられなかった要因である可能性も考えられる。ある次元で脅威を体験したとき、その次元以外の自己の諸側面について想起し、肯定的な自己知識にアクセスするためには、一定の時間が必要であろう。その時間的余裕が、本実験では十分ではなかったのかもしれない。

したがって、今後は、自己複雑性や、脅威体験からの時間経過を考慮して、レジリエンスを発揮しうる条件下での検討を行い、その条件下において補償的な平均以上効果の生起を規定する要因を検討する必要があるだろう。また、ガンのような身体的な脅威や、対人関係を断たれるといった社会的な脅威は、本研究のような知的能力についての脅威とは異なる影響をもつ可能性が考えられる。よって、さまざまな脅威体験後の補償的な平均以上効果についても検討を行う必要があるし、それらが精神的健康や適応に実際にどのように結びつくかも検討する必要があるだろう。

## 【付記】

1) 本研究は、第2著者の指導のもとに第1著者が平成19年度に大阪市立大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部を、新たな考察を加えまとめ直したものである。本研究の一部は関西心理学会第119回大会で発表された。

## 【引用文献】

- Alicke, M. D. 1985. Global Self-Evaluation as Determined by the Desirability and Controllability of Trait Adjectives. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1621-1630.
- Alicke, M. D., & Govorun, O. 2005. The better-than-average effect. In *The Self in Social Judgment*, edited by M. D. Alicke, D. A. Dunning, & J. I. Krueger, pp.85-106. Psychology Press, New York
- Alicke, M. D., Klotz, M. L., Breitenbecher, D. L., Yurak, T. J., & Vredenburg, D. S. 1995. Personal contact, individuation, and the better-than-average effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 804-825.
- Allison, S. T., Messick, D. M., & Goethals, G. R. 1989. On being better but not smarter than others: The Muhammad Ali effect. *Social Cognition*, 7, 275-296.
- Brown, J. D., & Dutton, K. A. 1995. The thrill of victory, the complexity of defeat: Self-esteem and people's emotional reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 712-722.
- Brown, J. D., & Smart, S. A. 1991. The self and Social conduct: Linking self-representations to prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 368-375.
- Chambers, J. R., Windschitl, P. D. 2004. Biases in social comparative judgments: The role of nonmotivated factors in above-average and comparative-optimism effects. *Psychological Bulletin*, 130, 813-838.
- Cross, K. P. 1977. Not can, but will college teaching be improved? *New Directions for Higher Education*, 17, 1-15.
- Dodgson, P. G., & Wood, J. V. 1998. Self-esteem and the cognitive accessibility of strengths and weaknesses after failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 178-197.
- 遠藤由美 1995.「精神的健康の指標としての自己をめぐる議論」『社会心理学研究』第11巻, 134-144.
- Heatherton, T. F., & Polivy, J. 1991. Development and validation of a scale for measuring state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 895-910.
- 伊藤忠弘 1999.「社会的比較における自己高揚傾向: 平均以上効果の検討」『心理学研究』第70巻, 367-374.
- Josephs, R. A., Bosson, J. K., & Jacobs, C. G. 2003. Self-esteem maintenance processes: Why low self-esteem may be resistant to change. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 920-933.
- 唐澤真弓 2001.「日本人における自他の認識—自己批判バイアスと他者高揚バイアス—」『心理学研究』第72巻, 195-203.
- Klar, Y. 2002. Way beyond compare: Nonselective superiority and inferiority biases in judging randomly assigned group members relative to their peers. *Journal of Experimental Social Psychology*, 38, 331-351.
- Kruger, J. 1999. Lake Wobegon be gone! The "below-average effect" and the egocentric nature of comparative ability judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 221-232.
- 工藤恵理子 2004.「平均点以上効果を示すものは何か: 評定対象の獲得容易性の効果」『社会心理学研究』第19巻, 195-208.
- Linville, P. W. 1985. Self-complexity and affective extremity: Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, 3, 94-120.
- Linville, P. W. 1987. Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 663-676.
- 学阪良二・梅本堯夫 1984.『新訂京大NX15-知能検査第2版 京大NX15-知能検査』大成出版牧野書房。

- Otten, W., & van der Pligt, J. 1996. Context effects in the measurement of comparative optimism in probability judgments. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 15, 80-101.
- 榎美知子 2006. 「自己知識の構造が気分不一致効果に及ぼす影響」『心理学研究』第77巻, 217-226.
- Seta, J. J., Seta, C. E., & McElroy, T. 2006. Better than better-than-average (or not): Elevated and depressed self-evaluations following unfavorable social comparisons. *Self and Identity*, 5, 51-72.
- Steele, C. M. 1988. The psychology of self-affirmation: Sustaining the integrity of the self. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, 261-302.
- Suls, J., Lemos, K., & Stewart, H. L. 2002. Self-esteem, construal, and comparisons with the self, friends, and peers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 252-261.
- Tabachnik, N., Crocker, J., & Alloy, L. B. 1983. Depression, social comparison, and their false-consensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 688-699.
- Taylor, S. E. 1983. Adjustment to threatening events: A theory of cognitive adaptation. *American Psychologist*, 38, 1161-1173.
- Taylor, S. E., & Brown, J. D. 1988. Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.
- Taylor, S. E., Lerner, J. S., Sherman, D. K., Sage, R. M., & McDowell, N. K. 2003. Are self-enhancing cognitions associated with healthy or unhealthy biological profiles? *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 605-615.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. 1984. Friendship choice and performance: Self evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 561-574.
- 外山美樹・桜井茂男 2000. 「自己認知と精神的健康の関係」『教育心理学研究』第48巻, pp.454-461.
- 外山美樹・桜井茂男 2001. 「日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象」『心理学研究』第72巻, pp.329-335.
- Vohs, K. D., & Heatherton, T. F. 2004. Ego threat elicits different social comparison processes among high and low self-esteem people: Implications for interpersonal perceptions. *Social Cognition*, 22, 168-191.
- Wicklund, R. A. & Gollwitzer, P. M. 1982. The psychology of compensation. In *Symbolic Self-completion*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- 山本真理子 2001. 自尊感情尺度心理測定尺度集 I 一人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉一畑洋道 (監修). 山本真理子 (編) サイエンス社 pp. 29-31.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982. 「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』第30巻, pp.64-68.
- Zuckerman, M., & O'Loughlin, R. E. 2006. Self-enhancement by social comparison: A prospective analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 751-760.

【2009年9月10日受付、10月23日受理】

## **Better-Than-Average Effect as Compensation under Ego-Threatening Situations among Individuals with High vs. Low Trait Self-Esteem**

**TABATA Takuya and Tomoko IKEGAMI**

This study examines whether the better-than-average effect stems from self-enhancing motives by using a bogus feedback paradigm. We hypothesized that if people experience self-threatening events in one dimension, they exhibit greater better-than-average effects on other irrelevant dimensions for compensation. One hundred-twenty undergraduates with high vs. low trait self-esteem participated in the experiment. They were randomly assigned to one of the three feedback conditions to manipulate levels of threat to self in the dimension of intelligence. Afterwards, they rated kindness and sociability for their levels (percentiles) within their peer groups. Contrary to our predictions, we found that the size of better-than-average effects became smaller regardless of levels of trait self-esteem as the threat levels increased, indicating that negative events in one aspect of self influenced other aspects as well. The results were discussed in terms of self-complexity and accessibility of coping resources for compensation.